



唐獅子

私には、どうしても見ておきたい「あるもの」があった。この思いは以前から漠然とあったのだが、唐獅子執筆が、「ボン！」と私の背中を押してくれたのだった。こうして7月6日、私はアメリカ合衆国の首都・ワシントンDCへと旅立った。

さて、ワシントン到着の晩、目的の見学を翌日に控えながら、私は、ジョージタウンにある「ブルー・アレイ」という、老舗のジャズバーに出かけてみたのだった。生憎、満員で相席にはなったのだが、運よく、主演であるピアノ奏者、マーカス・ジョンソンの目の前に案内されたのだった。しかし、そのテーブルは、40歳前後と思われる黒人男性と、30代半ばと思われる黒人女性の大切な二人の空間であったのだ。私は、「幸せな二人のテーブルに入り込み、誠に申し訳ない」という旨を二人に告げた。すると、この男性はニコニコと笑いなから「ノープロブレム！今夜は彼女のバースデーだから、一緒に祝ってくださいよ」となんとも温かく歓迎してくれたのであった。そのおかげで、私は落ち着いて曲を聴くことができたのだった。

ところが、演奏もラストにさしか

旅と文学・1

鳥光 宏

かった頃だった。突然マーカスが深刻そうな顔で語り始めたのだ。

「俺ね、凄く好きな人がいてね、今日が彼女のバースデーなんだよね。だからさ、マーカス・ジョンソンみたいな、イケアル奏者の生演奏聴かせながら、プロポーズしちゃったら、彼女はきつと『イエス』って言うてくれちゃうだろうなあ、なんて思ってたさ……」と言いなから、マーカスがスッと、目の前の二人に目をやると、会場の皆がこちらのテーブルに視線を移す。すると、黒人男性はいつの間にかダイヤのエンゲージリングを指先に持ち、微笑みながら彼女に差し出している。その隣では、彼女が大粒の涙をキフキフと輝かせながら微笑んでいた。それを見て、少しおちやめにマーカスが「イエス？」とマイクを通して彼女に尋ねて見せた。彼女は「イエス！」と頷きながら答え、そしてその後二人は甘いキスをした。すると、それまでシーンと静まっていた場内が、拍手喝采の嵐となったのだった。

洒落た小説の一節みたいなこの晩の出来事が、私自身の人生の一節にもなり、そして、この旅の幕開けともなったのだった。(講師・作家)



唐獅子

ワシントン到着の2日目。その日は、前回お話をした「あるもの」を見に行く日であった。目的地は国立航空宇宙博物館・別館である。

さて、博物館に入り、私の眼には遠くからでもそれが目に入った。B29爆撃機「エノラゲイ」である。そう、1945年8月6日、広島に原子爆弾「リトルボーイ」を投下した飛行機だ。この原子爆弾一つで、当時35万人と推定される広島市の人口のうち、14万人が亡くなったといわれている。町は一瞬にして焼失し、黒焦げの死体が重なり合っていたという。また、辛うじて生きていた人々も、皮膚が垂れ下がり、手足が吹き飛び、それぞれ地獄絵のようであったといわれている。しかし、翌日7日の新聞には、「広島がB29によって爆撃され、若干の被害があった」という趣旨の記事が載っただけだったのだ。結局、そこには『真実』が語られていなかった。

今まで、私自身もこの飛行機がこれほどまでに力に輝く銀色だとは思っていなかった。また、隣に展示されている日本の小さな戦闘機と比べたら、ガリバーと小人くらいの比であるということも初めて知っ

鳥光 宏

旅と文学2

た。さらに、B29の「B」とはあのジャンボジェット機が「B747」と表記されているのと同じで、ボーイング社の頭文字であることも、あらためて認識させられた。つまり、我々はあのエノラゲイの子孫にあたる飛行機に乗っていることになるのだろう。

こうして考えてみると、普段どこまで我々は『真実』を見詰めているのだろうか、と疑問に思えてきてしまう。世界中で唯一、核兵器によって被爆した国でありながら、平和利用の名のもとに、原子力発電がどんどん推進されてきてしまった結果が今にある。「推進か離脱か」の議論をする前に、どうしてもっと「広島・長崎」を語らないのだろうか。どうしてもっと「放射線」についての議論を重ねてこなかったのだろうか。さらに沖縄に目を移せば、嘉数高台から望遠鏡で普天間飛行場を眺め、「これは大変だ」と言っていた政治家の言葉は、果たして『真実』を見ての言葉であったのだろうか。博物館を出ると、ワシントンの夏空が青く澄んで眩しかった。私は、広島のある日の夏空を想いながら博物館を後にした。(作家・講師)



唐獅子

ワシントンのホテルでバイキング形式の朝食をとっている時のことだった。私は、スープ用とおぼしきカップとソーサーを持ち、配膳台に並んだ容器の蓋を片っ端から開けてスープを探していた。

すると突然、「あなた、何を探しているの?」と、黒人ウエートレスのおぼちゃんの声がかけてきた。

私は、「スープ、スープ」と言いながら、手に持っていたカップを高く掲げて示してみせた。すると、このおぼちゃんも、「スープ?」と、いかにも訝しげに聞き返してきたのだった。「だって、ここにスープカップがあるから…」と私が途中までいうと、彼女は唐突に「あなたはどこから来たの? 何人か?」と、いきなり国籍を問うてきたのであった。「なんで、朝から国籍聞かれるわけ?」とは思いながらも、「JAPAN, JAPANESE!」と少しづつきりぼつに私は答えた。「JAPAN?」と言って、彼女は随分と珍しいものを見るかのようにして首をかしげ、次に「日本人は朝からスープを飲むのか?」と聞いてきたのだ。私は、「えっ? 日本人って珍しいの? スープって朝は飲まな

鳥光 宏

旅と文学3

いの?」と不思議な思いにさらされてしまったのだった。彼女が言うところには、ここではあまり日本人は見ないし、どうやら朝は忙しいのだから、アメリカ人はスープなんて悠長に飲んだりする習慣はないというのであった。私は「OK!」とだけ言い、カップを戻して席に座った。

さて、私が再び食事を始めると、彼女は例のカップを持って私のテーブルにやって来た。その中には、お粥おかゆのようなどろりとした物が入っている。彼女は、「オートミール!

これがアメリカの朝の味よ! プラウンシュガーをたっぷり入れてきたから」と言って誇らしげに胸を張り、首を縦に振っている。「朝からそんな甘いものを食べるわけ?」と躊躇ためらする私に、「えあ、どうぞ!」と促すような目くばせをして彼女は立っている。完食はしたものの、その気だるい甘さを笑顔で取り繕う私を尻目に、彼女は「どう、おいしいでしょう?」と言い、満足げにほほ笑んでテーブルから去っていった。

こうして、旅は新しい発見と、新たな人間ドラマを私に提供してくれる。この朝、また私の物語が一ページ増えたよっだ。(講師・作家)



唐獅子

5年前の2月、私はアンコールワット遺跡群で有名な、カンボジアのシエムリアップを訪れた。旅立つ前の私のイメージは、教育・医療活動の遅れている貧しい地域であるというものであった。しかし、道路は整備され、人々の笑顔は逆に私を驚かせるくらいに明るいものであった。そして、「偉大なる川」という意味のメコン川は自然の母のごとく、彼らを大きな懷で包みこんでいた。

さて、シエムリアップでは、「日本語」という文字が背中に書かれたTシャツを着ている人をよく見かけたのだが、これが一体何なのか、不思議で仕方がなかった。しかし、その謎を解くチャンスがやって来た。それは、街中の食堂からホテルまでの帰路、オートバイによるタクシ―、「バイククシ―」を利用した時のことだった。この運転手の若者が、例の「日本語」Tシャツを着ているではないか。この若者が「あなた日本人ですか?」と、少々たどたどしい日本語で聞いてきたのだ。私が「はい」と答えると、彼は実に嬉しそうにガッツポーズをして見せるのであった。そこで、私は思い切つて、その日本語Tシャツが何である

鳥光 宏

のかを聞いてみたのだ。すると彼は、「日本語教室に通う人が着いています」と言うのだった。私は、「日本語教室か。それは日本人が教えるの? 授業料はいくらなの?」と率直に聞いてみた。すると彼は、「日本人教えます。日本語勉強したカンボジア人がボランティアで教えます」と少し寂しげに言うのだった。

彼らは、小学校が始まる前の時間を利用して、朝5時から時間帯を2回に分けて授業を受けるのだそうだ。前政権下において、政権に反旗を翻すような教育を恐れ、教師は皆殺しにされてしまったとも言っていた。そしてその後で、「日本人、学校造ってくれてありがとう。でも、本当は私たち、先生作つてほしい」と真剣なまなざしで言われてしまった。私は返す言葉を失ってしまった。彼は「私たち、日本人すごいと尊敬しています。だから私は日本語勉強して日本の会社で働くのが夢です」と、恥ずかしそうに日本語で一生懸命語るのだった。私は、滔々たうたうと流れるメコン川で見た夕陽を、彼の心の中に見た思いがした。

だが、尊敬された国は、今は迷路の中にいるようだ。(講師・作家)

旅と文学4